

新交響楽団第一四五回演奏会
伊福部昭・傘寿記念シリーズV



アマチュアオーケストラ

新交響楽団第145回演奏会

The New Symphony Orchestra The 145th Concert



指揮：原田 幸一郎

HARADA Koichiro, conductor

ウェーバー：歌劇「魔弾の射手」序曲

Carl Maria von WEBER : Overture to the opera “Der Freischütz”, 1820

ベートーヴェン：交響曲第4番 変ロ長調 作品60

Ludwig van Beethoven : Symphony No.4 in B♭ major Op.60, 1806

第1楽章 *Adagio — Allegro vivace*

第2楽章 *Adagio*

第3楽章 *Allegro vivace — Un poco meno Allegro*

第4楽章 *Allegro, ma non troppo*

——— 休 憩 ———

伊福部 昭：シンフォニア・タプカーラ(改訂版)

IFUKUBE Akira : Sinfonia Tapkaara, 1955 (rev.1979)

《伊福部 昭・傘寿記念シリーズV》

第1楽章 *Lento — Allegro*

第2楽章 *Adagio*

第3楽章 *Vivace*

1994年10月10日(月・祝) 2:00p.m.

東京芸術劇場大ホール

Monday, October 10, 1994 at Tokyo Geijutsu Gekijo

主催：新交響楽団

表紙写真：山崎慎一郎

傘寿によせて

伊福部君、傘寿おめでとう。君はかつて僕のことを「メフィストフェレス」になぞえ、「彼は、少年である私をそそのかし、私を作曲という地獄界に陥し入れたメフィストフェレスなのです」と記しているが、このまるで凄味のないメフィストも年老いて更に神通力を失っているが、かねてから督促してきた弦楽四重奏曲をぜひ完成させてほしい。「音にならなければ、音楽（楽曲）は存在しない」とはR.ヴォーン・ウィリアムズの名言だが、伊福部の傘寿を音にしてくれた新交響楽団に感謝！

三浦淳史（評論家）

伊福部昭先生の門をはじめて叩いてから、はや39年の歳月が経ちました。若い頃、幾夜も、幾夜も、音楽の最も大事なことについて、私が誤った道にそれないように懇懇と教示して下さいました。昨今になってやっと、そのことの意味の重さがしきりに感じられ、大きい御恩に頭の下がる思いであります。

松村禎三（作曲家）

伊福部先生の傘寿をお祝い申し上げます

素朴で力強いチラシを見ながら、この企画に感謝し、「シンフォニア・タブカーラ」初演版のスコアを清書させて頂いた芸大在学中をつい思い出しています。そして、今回シリーズで取上げられた5曲をはじめ伊福部先生のオーケストラ作品が、永遠のレパートリーとして更に頻繁に上演されることを、先生の御健勝と併せて心から願います。新響の演奏成功を確信しつつ。

三木 稔（作曲家）

〈古希〉、〈傘寿〉、そして〈卒寿〉へ

伊福部昭先生が〈傘寿〉をお迎えになり、慶賀に堪えません。その記念《伊福部昭シリーズ》を「新響」がおこなってきて、今回の最終回に先生の《シンフォニア・タブカーラ》を演奏すると聞き大変嬉しく思い、同時に十年前の「古希記念コンサート」を懐かしく思い出しました。

1984年、——《ギリヤーク》から《ゴジラ》まで——というコンサートが東京文化会館で開かれました。〈第一期生〉ともいふべき伊福部先生の弟子たち—芥川也寸志、池野成、石井眞木、今井重幸、永富正之、原田甫、松村禎三、真鍋理一郎、黛敏郎、三木稔—が中心となり、先生の作品《ギリヤーク族の古き吟誦歌》の各章を数人の弟子がオーケストレーションして発表したり、《怪獣ゴジラ》を演奏したり、私の指揮で《日本の太鼓》を演奏し、その和太鼓パートを弟子たち全員で叩いたり、華やかに先生の古希をお祝いしました。その時のオーケストラはわれらの「新響」であり、今は亡き芥川也寸志さんが、今回演奏される《タブカーラ》を指揮しました。

伊福部先生には、これからもお元気に創造活動をお続けになり、われわれを驚かすような素晴らしく独創的な〈新作〉をものされることを期待いたします。そして、再び十年後の卒寿の会では〈最新作〉を「新響」の演奏で賑々しくお祝いできれば、と念じております。

先生、傘寿おめでとうございます。

石井眞木（作曲家）

●指揮

原田 幸一郎

HARADA Koichiro, conductor



1945年生まれ。桐朋学園とジュリアード音楽院で斎藤秀雄、秋山和慶、ドロシー・ディレイ、イヴァン・ガラミアン氏らにヴァイオリンと室内楽および指揮法を学ぶ。69年から12年間、東京クワルテットの第1ヴァイオリンをつとめ、世界の檜舞台で常に高い評価を受けてきた。81年に東京クワルテットを離れ、クリーヴランド音楽院のヴァイオリン科主任教授とイェール大学、アスペン音楽祭でも教鞭をとりつつ、室内楽奏者として、ニューヨークのリンカーン・センターやワシントンD.C.等のコンサートで広く活躍した。

83年からは日本に居を移し、ソリストおよび室内楽奏者として内外で活躍。さらに86年には数住岸子と“NADA”（ナード）室内楽シリーズをスタート、従来にない高度なアンサンブルを誇っている。

88年4月、九州交響楽団の〈モーツァルト定期〉で指揮デビューを飾り、翌月の新日本フィル〈ハイドン定期〉の東京デビューも好評を博した。90年には新日本フィル定期デビュー、東京フィル〈モーツァルト定期〉、〈倉敷音楽祭祝祭管弦楽団〉等を指揮。以来、新日本フィル〈モーツァルト定期〉、札幌交響楽団定期等を指揮し、室内楽を究めた音楽家ならではの名演を聴かせている。94年には5月に札幌定期、6月に京都市響定期を指揮した。

室内楽奏者として長年にわたって培われた、豊かで暖かな音楽性とアンサンブルでの明敏で細やかな感受性は、他の指揮者と一線を画するところである。

新交響楽団とは89年以来毎年共演しており、今回が7回目となる。

ウェーバー：歌劇「魔弾の射手」序曲

長島 良夫(チェロ)

Carl Maria von WEBER：Overture to the opera “Der Freischütz”

モーツァルトにはオペラが10以上あります。「フィガロ」「ドン・ジョバンニ」「コシ・ファン・トゥッテ」「魔笛」、といった傑作の数々について、改めていうこともありません。

ところでこれらのオペラ、何語で歌われているかご存知でしょうか。答えは誰でも知っている通り、イタリア語かドイツ語です。その中でもドイツ語のオペラといえば、有名などころでは「後宮よりの逃走」と「魔笛」くらいしかありません。モーツァルトはオーストリア人ですから、ドイツ語を母国語としていたにもかかわらずです。

モーツァルトの活躍した18世紀末は、ヨーロッパ中どこでもイタリア・オペラが全盛で、宮廷作曲家や歌手などはイタリア人の独占市場でした。イタリア語にあらざればオペラにあらず、といった状態でしょう。ですから、この時代のドイツ語のオペラとして重要なのはモーツァルトの作品の他に、ベートーヴェンの「フィデリオ」(1805年初演)があるくらいのものです。

イタリア・オペラの絶対的優位という状況にもかかわらず、自分達のことばで、自分達の身の回りのこと、たとえば伝説や昔話から題材をとってオペラを作ろうという動きが盛んになってきます。音楽におけるナショナリズムの台頭といったところでしょうか。当時はまだ1つの国ではありませんでしたが、ヨーロッパの中央に位置するドイツもこの動きと無関係ではられません。

そこで、いよいよ「魔弾の射手」の作曲家ウェーバーの登場です。このオペラは1821年にベルリンで初演され、上に述べた時流にも乗って空前の成功を収めました。ドイツ・ロマン派の始まりです。

＊

オペラ「魔弾の射手」で特徴的なことを1つ挙げましょう。そこではじめにこななければならないのは、有名な「狼谷の場」を含め、ほとんどの場面が森の中で展開されているということです。この物語の舞台はドイツではなく、実はボヘミアなのですが、森のイメージとドイツとの関係は切り離せないものが

あります。

昼なお暗く鬱蒼とした森。その広大さは一体どのくらいなのか、誰にも想像がつきません。ひとたび迷い込んだらもう出て来られないような奥深さ。狼は腹を空かせて、目をぎらぎらさせて徘徊し、森に棲む人々は狩人として、鳥や獣を捕ることによって生活しています。

夜になれば家のすぐ外で悪魔や妖怪達が我が物顔に跳梁跋扈しているような世界。

キリスト教は長い時間をかけて、それら異教の神々を少しずつ片付けてきましたが、森の中までには手が回らなかったのでしょうか。キリスト教の圧迫から逃れて森の中へ逃げ込んだ妖怪達と考えれば、少しは彼らに親近感も湧こうというものです。

序曲は、このような世界を描いて余すところがありません。

出だしはちょっと不気味ですが、すぐにホルンの四重奏が長閑に始まります。しかし、この気分も長続きしません。弦のトレモロがかすかに聴こえてきて、辺りは緊張感を高めます。

曲が速くなってハ短調になると、悪魔や妖怪の登場です。ちなみに、このオペラではハ短調は魔界の調とか。主人公マックスは、悪魔に魂を売って、百発百中の弾(魔弾)を手に入れ、射撃大会に優勝し、恋人のアガーテと正式に結婚しようとしています。でも、この曲は悲劇ではありません。この2人の主人公は最後にはめでたく結ばれるというわけで、序曲の方も力強く凱歌を挙げてしめくられるのです。

初演：1821年6月18日、ベルリン王立劇場
楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部

ベートーヴェン：交響曲第4番 変ロ長調 作品60

畑 修一(ヴィオラ)

Ludwig van Beethoven : Symphony No.4 in B♭ major Op.60

肌寒い秋風の吹く中ドナウ川の土手を1人歩いていると、もう15年にもなるだろうか、しばらく帰らない遠くはなれた故郷、ライン川のほとりの町ボンのことが思い出される。春には、交響曲第4番の初演を含む自作品による演奏会で好評を博し、夏にはバーデン滞在を経てミサ曲ハ長調をつくり上げ、またその頃大作を次々と発表していた彼は、出版社との交渉にも忙しい年であった。

第1楽章 アダージョ-アレグロ・ヴィヴァーチェ

霧の漂う深い森の中。長い序奏の中で転調を繰り返した後始まるモーツァルト風の快活な音楽が生きる喜びをうたう。

＊

1802年のハイリゲンシュタット滞在は、その「遺書」が物語るように、身体的、精神的苦悩に満ちたものであった。しかし、その苦難を克服し、芸術家としての使命に目覚め、演奏家としてではなく創作家として復活した彼は翌1803年から1804年にかけて交響曲第3番《英雄》を完成させている。

第2楽章 アダージョ

高雅な情緒をもつ静かな楽章。作曲者の心の平穏と幸福を反映しているのか、彼の9つの交響曲の緩徐楽章の中でも独特な気品を備えている。クラリネットが天使の声を奏でる。

＊

ベートーヴェンがヨゼフィーネと初めて出会ったのは1799年5月のことで、当時彼女は父のブランズウィック伯爵に連れられウィーンに滞在しており、姉のテレゼとともにベートーヴェンからピアノの教授を受けていた。その後、彼女はダイム伯爵と結婚し四児をもうけたが、1804年1月に夫に先立たれる。ベートーヴェンは未亡人となったヨゼフィーネと恋に陥り、伝えるところによると、彼は1804年末頃からほとんど毎日彼女の家を訪ねていたということである。

第3楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ-ウン・ポコ・メノ・アレグロ

静寂な曲趣は一掃され、踊るような活気、溢れ出る歓喜がうたわれる。何も記入されていないが、メヌエットに近いスケルツォである。

＊

1806年には、ピアノ協奏曲第4番、ラズモフスキー四重奏、ヴァイオリン協奏曲、交響曲第4番などを作っていた。彼の全生涯の中で最も静穏な時期であり、それは経済的に安定していたこともあるが、幸せな恋愛の影響も大きい。交響曲第4番に関しては、オッペルドルフの依頼を受け2、3ヶ月の間に書き上げており、翌1807年3月、前述の演奏会で旧作の3つの交響曲、コリオラン序曲等とともに演奏されている。

第4楽章 アレグロ・マ・ノン・トロッポ

細かい16分音符の無窮曲。《英雄》や《運命》の終楽章のような激しさはなく、やさしささえ感じさせるハイドン風の音楽である。

＊

以前は、ヨゼフィーネではなく姉のテレゼと婚約していたとされていたが、その説は1949年に発見されたベートーヴェンのヨゼフィーネ宛の13通の手紙により覆された。手紙によると、1807年秋に2人の恋愛は終わっており、原因はベートーヴェンの財産の欠如、身分の相違等が考えられるが、実際は判らない。しかし、それ以後も意欲的な創作活動は続き、ロマン・ローランが「傑作の森」と呼んだ中期作品群はいよいよクライマックスを迎え、1808年には交響曲第5番、第6番、翌1809年にはピアノ協奏曲5番や弦楽四重奏《ハーブ》を生み出していくことになる。

初 演：1807年3月、ウィーン、ロブコヴィッツ公爵邸
楽器編成：フルート1、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

伊福部 昭：シンフォニア・タブカーラ(1979年改訂版)

上原 誠(打楽器)

IFUKUBE Akira : Sinfonia Tapkaara

“シンフォニア・タブカーラ”あるいは“タブカーラ交響曲”は伊福部昭の作曲活動の集大成である、と私は考えている。その理由として、まずこの曲が三浦淳史(現・評論家)に捧げられていることに注目したい。1926年、札幌二中に入学した伊福部が出会った同級生・三浦は、その頃既に抜きん出た音楽通だった。サティ、ドビュッシーといった当時の日本では名前すら知られていなかった音楽を次々に紹介し、西洋音楽に目覚めたばかりの伊福部に“超”カルチャー・ショックを与えただけではなく、「音楽をやる以上は作曲以外は無意味」と説いた。伊福部が後に語っている「私を作曲という地獄界に陥れたメフィストフェレス」、すなわち作曲家・伊福部昭にとってかけがえのない人に宛ててこの曲は捧げられている。

[伊福部にとって交響曲とは]

作曲に手を染めた伊福部にとって最初に広く評価を得た作品は、前回の当団演奏会でとりあげた『日本組曲』の元曲『ピアノ組曲』だった。この曲の4部構成は、交響曲の形式を意識したものともみることができる。また伊福部にとって唯一の作曲の師であったアレクサンドル・チェレプニンにひと月ほど個人教授を受けた際、交響曲を作曲するにはまだ技術不足とクギを刺されたのは、交響曲作曲の希望を口にしたからではないか。実際、チェレプニンの教えの、いわば成果として作曲された『交響譚詩』の第1部はソナタ形式がとられ、交響曲への意欲を伺わせている。すなわち伊福部は、かなり早いうちから交響曲に対する憧れの気持ちを抱き続けていたに違いない。『ピアノ組曲』から21年、名著「管弦楽法」の923ページにおよぶ第1巻とほぼ時を同じくして、いわば満を持しての「交響曲」というタイトルを持つ作品の発表であった。

[タブカーラの意味するもの]

私は国立劇場でのアイヌの民族芸能公演で、この“タブカーラ”という踊りを見たことがある。幣冠をつけ、太刀を帯びた長老がしっかりと足を踏みしめ、憑かれたように無心に舞う様は力強く、また荘

重だった。この「タブカーラ」の意味である「足を踏みしめる」動作は、悪霊を追払い良霊を招くというもの。同じ意味を持つ陰陽道における「反閤」や、あるいは修験道の足踏みの所作など、日本の古い信仰に根ざした動作が各地の民族芸能や宗教儀式に今も多数見られる。かつて見た岩手県早池峰山麓大 償おおつぐないの山伏神楽にも似た動作があり、身近なところでは相撲しこの四股もこれにあたると言われている。伊福部はこの動作に自然の恵みのみによって生きていた古 人いにしえびとたちに共通する、大地への感謝と畏敬の気持ちを感じ取ったのではないだろうか。

これをさらに「大地礼讃」という言葉に結びつけるのは決して強引なこじつけではない。ご承知の通りこれはストラヴィンスキーの『春の祭典』の第1部のタイトルだが、この『春の祭典』こそ、10台半ばの伊福部が西洋音楽に親しみながらも、今ひとつ違和感を抱き、徒らに西洋の美学を追従することに疑問を感じていた頃、初めて出会った自分の感覚にかな適う音楽だった。そして自らの言葉で語る音楽を作ることに意欲を燃やし、本格的に作曲の勉強にとりかかった。しかしストラヴィンスキーとの結びつきはこれに止まらず、前述のチェレプニンの父親、ニコライ・チェレプニンに遡る。彼はペテルブルク音楽院でリムスキー＝コルサコフに学んだ作曲家・指揮者で、リャードフらと共に「新ロシア楽派」を称して「五人組」の後継者を自認し、未だ西洋文化偏重の強かったロシアで民族主義の旗を掲げていた。やがてディアギレフに起用され、1909年のロシア・バレエ団のパリ・デビュー公演を指揮するとともに作品を提供し、引続き1914年まで指揮者・作曲家・編曲者として参画した。その間、彼の流れを継ぐストラヴィンスキーがかの3部作を発表し、当時の文化の中心地だったパリに次々と衝撃を与えていく現場を目のあたりにし、我が意を得たりと喜び、息子にも繰返し語ったに違いない。志を継いだ息子は来日の折、日本の若い作曲家に向けて「自らの文化に忠実であれ」と説き、日本の国民音楽の確立にエールを贈った。そして伊福部21歳の時の作品『日本狂

詩曲』にその実現を見出し、創作活動の根本理念をも、殊のほか熱心に伝授した。

こうして伊福部は若い頃芽生えた疑問から発し、やがて「芸術は、その民族の特殊性を通して共通の人間性に到達しなければならない」という確固とした信念に至った。

伊福部は幼い頃、北海道の僻地で先住アイヌ民族の生活・文化に深く関わり、民族間の差異に衝撃を受けながらも彼等の逞しさに大きな感動を覚えた。作曲者はこの曲を語る際「ノスタルジア」という言葉を使っているが、彼の個々の作品を見つめる厳しい目と独特のシャイな気持ちがそうさせたにせよ、私にはふさわしい言葉とは思えない。この曲はタプカーラという民族性を通して大地礼讃という共通の人間性を高らかに歌いあげたものの、すなわち伊福部の信念そのものの表れであると私は確信している。

地球環境を危うくするさまざまな問題が発生し、

世界の人々が手を携えて取り組んでゆこうという機運が高まり始めた今日、大地＝地球に対する感謝と畏敬の気持ちをあらためて思い起こし、共通の人間性に高めてゆくことこそ、このかけがえのない地球を子や孫たちに残すための、最も力強い原動力となるろう。今、伊福部の送るメッセージの意味は大きい。

＊

この曲の初稿は1954年に完成したが後に改訂を施し1979年12月に脱稿した。作者によれば主たる改訂は、1楽章の冒頭、2楽章の中間部、3楽章の結尾部に行われたという。改訂版の初演は1980年4月6日、芥川也寸志指揮により、当団第87回演奏会「日本の交響作品展－4 伊福部昭」で行われた。

初 演：上記参照

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、コールアングレ、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、トムトム3、小太鼓、キューバン・ティンパレス、ギロ、弦楽5部



☆石井真木指揮、新交響楽団
ベルリン・バーカッション
(録音：1993年9月7日、ベルリン・フィルハーモニー・ライヴ)
ⓈCOCO-78134 ¥2,800(税込) 発売中！

DENON

発売元・日本コロムビア株式会社

石井真木
浮遊する風
輪廻(サムサーラ)
藤田正典

石井真木 新交響楽団
ベルリン公演ライヴ

＊「現代音楽のプロか!?」
日本の音楽界のレベルの高さに
音楽都市ベルリンが脱帽！

近況、そして「タブカーラ」のことなど

伊福部昭インタビュー

●インタビュアー
小宮多美江

小宮 ゴジラ関係のインタビューは一段落ですか。

伊福部 40年祭（ゴジラの誕生は1954年）ということで、ちょっと辛かったですけどね。「三管編成で」なんて言うと、「管楽器が全部で3本ですか」なんて質問されて、一から説明しなきゃならないこともありました（笑）。また今年もゴジラの新作ができましたが今度は遠慮しました。体力も限界です。

小宮 今、手がけられているのは何ですか。

伊福部 この10月30日に私の故郷——鳥取^{いなば}の因幡、白兔の因幡ですが、国府町というところに因幡万葉歴史館というのができるんです。大伴家持^{おわとも}と私の家（因幡の豪族の娘であった伊福吉部徳足^{いふくべの}比売^{ひめ}の古墳があり、伊福部昭は67代目にあたる）のご縁で、その開館式に大伴家持の歌で演奏会をやりたいので曲を書いてくれということになりました。お箏とアルトフルートと歌の3人です。この歌は因幡の国守だった大伴家持が国府へ来て詠んだ万葉の最後の歌で、「新しき年の始の初春の今日降る雪のいや重け吉事」で始まり、5曲になります。

小宮 私もあそこへは行きましたが、ほんとに大らかな景色でした。今年は他に何か？

伊福部 あとは何も書いておりません。ただ今年2月に、格闘技をやる佐竹雅昭という人に頼まれて。試合ではいつも私の「ゴジラ」の音楽を使って威勢よく出てくる（近年、格闘技では選手がリングに入るとき、それぞれのキャラクターに合わせた音楽を流すようになってきた）。しかしリングに上がるところになるとフルートのソロになっちゃってどうも力が出ないから、書き直して録音してもらえないか、と当人が見えたんです。なかなか痛恨な青年だね。

最初ゴジラがワーッと咆えて始まって、それで第2主題が出る前にまたワーッと咆えて終わり。彼は27歳なんですけど、世界のチャンピオンをほとんど取っているそうです。今度やるから見に来てくれと招待状持ってきました。それからゴジラが好きで、ゴジラ・グッズを1000ぐらい持ってる。これが外語大の英語を出てる。その後またスポーツ紙に「なぜ佐竹さんの曲を書く気になったか」とインタビュー

されて（笑）。

不思議なことに、僕の先生のチェレプニンが「ボクサーの入場（Op.37）」という曲を書いてるんですね。不思議な縁だなあ。

小宮 「タブカーラ」は年譜を拝見すると1954年になっていますね。先生はひとつの曲を何年もかけてお書きになる。

伊福部 そうですね。あの頃ははっきり言って私どもが書いても全然やってくれない時代でした。どなたかが書いてましたけれど、「伊福部は戦後いちばん古いタイプの作曲家」ということになったものですから。十二音（音楽）じゃないから全然問題にされない。でも十二音にはどうしても馴染めなかった。

せっかくあれだけの雰囲気で育ったんだからそれを書こうと思った。音更^{おとふけ}にいた頃は何でもないと思っていたけれど、アイヌの人たちは、結婚した、お産だ、家を建てた、といったは歌って踊って。そういう生活というのはかなり独自のものだというのが札幌に出て来てわかりかけて、東京へ来て懐かしさが倍増してきましたね。どこから頼まれたわけでもなかったので時間をかけてゆっくり書きました。どうせ上演されないと思って。

それがセヴィツキーから「どうしてる」と手紙が来たので「こんなものを書いている」と返事したら、すぐ送れということになって、インディアナポリス



写真：山崎慎一郎(以下同じ)



東京・尾山台の伊福部邸にて。漢学者・諸橋轍次筆の「無為」の額、ネパールの曼陀羅などが見える

交響楽団で急遽上演ということになったんです。

小宮 「タップカーラ」とはアイヌ語で「立って踊る」というような意味だそうですが。

伊福部 芥川(也寸志)君じゃないけど、「立たないで踊る踊りってあるんですか? って」(笑)。でもインドなんかにはあるんですね。しかしここでは「立って」というよりは「自発的に」という意味です。何かあって興が乗ったら踊る。「それじゃあ、タップカーラやろうか」とこちらの人がやりだすと、あちらで飲んでいた人もつられて踊り出す。非常に簡単な動きで。

小宮 完全に即興ですか。

伊福部 いや、型はありますけれど。きわめて簡単ですね。7月にアイヌを呼んでアイヌ音楽の講演を東京音大でやりました。ムックリ(アイヌ民族の口琴)の演奏を頼んだんですが、その人たちが、どうせここまで来たんだから踊っていく、というんです。昔、十勝平野がイナゴの大群で全滅したことを題材にした踊りだという。みんなも舞台に上がってください、という声に応じて物好きな人が30人ぐらい一緒に踊りました。学生さんも白髪の人も踊りましたよ。それだけ動作は簡単なんです。

小宮 先生の「タップカーラ」で強いてムックリの響きを連想させるところといたらどこでしょう。

伊福部 もしキザにこじつければ2楽章の中間部のオーボエのところ。コールアングレの旋律が乗ってくる。あれはそのような響きですね。

小宮 先生の音楽をアイヌの音楽と単純に結び付ける傾向もあるようですが。

伊福部 アイヌの音楽からは、音型や何かはなんにも影響を受けていません。ただ、自分の書いたものを発表するということへの抵抗感がない。彼らはすぐ即興でやりますからね。それが身についたということはあると思います。ピアノでも先生の所に習いに行ったら「これはまだ早い」とか、先生にみてもらってないから弾けないとか、そういう教育方法ですよ。そんなところで曲を書こうと思ったらモーツァルトから勉強しなきゃだめ、ということになる。

自分が思ったものを書いたらいいじゃないか、というような心構えというか、生活態度への影響はずいぶん大きいと思います。町で育ったらそんなこと絶対にやらない。そんなヘタッピなものを何だと言われそうで。ところが向こう(アイヌの人たち)では上手下手はあまり言わない。上手とか下手とか、

ここのペースが違うとか、そういう風な音楽教育をまったくなしで素人の世界を歩いてきたから、そういう点で、すごく影響を受けたと思います。

小宮 今、若い人が作曲しようとしても、とてもそんな環境にはいられませんね。

伊福部 日本の音楽でも芸術でもそうですが、ねらいが「憧れ」なんですね。憧れで集めてきた「根なし草」のようなものを寄せ集めたのが今の日本の近代文化の根底を成しているものだと思う。自発的なものじゃなくて憧れ。高山へ行ってきて「この植物いいな」と採ってきて自宅の庭に植えるのと同じような。枯れるに決まっているんです。根なし草からは花も咲かないし、実もならない。花瓶に活けた花も、しばらくは咲いてますけどね。

生活様式でもみんな「憧れ」で外国風にやってみるけれど、ゴロンとする場所がなくて、結局畳にするとか障子をはめるとか。体の中に伝統がプログラミングされてますからね。それが言うことを聞かなくなる。

音楽にもバブルがあったんですね（笑）。こわれちゃったけど。経済と同じ頃かな。それより前からひびが入ってましたけれど。

小宮 バブル後の音楽は？

伊福部 ちょっと見つからなくて困ってる状況でしょう（笑）。若い人も困っているようです。前衛も下火になったし、十二音書けばこれで済むというものでもなくなった。

小宮 先生の音楽の特徴のひとつとして、低音でこそ表現できる、というか低音への志向があるように思うのですが。

伊福部 そう言われればそうかもしれません。低音がしっかりしているのが好きですね。「伊福部さんの音楽はヴァイオリンなんかG線（最低音弦）だけあればいい」なんて冗談言われたこともあります。打楽器もトライアングルはあまり好きじゃない。

小宮 チェロ奏者もA線（最高音弦）の出番がほとんどないとか。

伊福部 今度使おう（笑）。ストラヴィンスキーが

自伝か何かで、自分は各楽器の高音域と低音域ばかり使って普通の音域を使わない悪い癖があって、それが次の時代に影響したようで困ったというようなことを言ってますね。

小宮 低音が表現するものには、大きいもの、広いものを感じます。

伊福部 狭い部屋に住んでいるけれど、心は野原にしているような感じなものですから。曲を書くときは。ある人が「伊福部さんの音楽は相手がなくて野原で怒鳴っているようだ」と言われた（笑）。それもそうだ。それから女性のファンというのがない。サインとか手紙とか、みんな男性。人に話したら、野原を機関車が走っているような感じだからだ、と。

小宮 なるほど鉄道ファンも男ばかりです。でも私も一応女のはしくれでして（笑）

本日はありがとうございました。

インタビューまとめ：今尾 恵介



新響は芥川也寸志の七回忌を来年、さ来年には創立40年を迎えるのだという。

ということは、箕作秋吉、清瀬保二、大木正夫、諸井三郎、平尾貴四男ら10人の10作品をならべた「日本の交響作品展」からもやがて20年。わたしは、20年前には、まだまだ雲をつかむようだった日本の作曲家ひとりひとりのイメージを、ちかごろになってようやく実体のあるものとしてつかめるようになった。その後もつづけられた新響やまたその他のオーケストラによる作曲家の個展や、室内楽を含めた奏楽堂の一連の「近代日本の音楽」演奏会などで得た聴体験のおかげである。

かつては唯一の文献だった富樫康著『日本の作曲家』（絶版）のほかにも秋山邦晴著『日本の作曲家たち』（音楽之友社）、『作曲家との対話』（新日本出版社）、クリティーク80編著・現代日本の作曲家シリーズ（音楽の世界社）など少しは参考書もふえた。もちろん音の記録も格段に多種多様に出てきて助かっている。

ところで、あらたな音楽像を結んでいくということは、それまでの常識をひとつひとつぬりかえていくことでもあった。

その「常識」には大きくいってふたつあり、作曲家を、どこの国で学んだか、先生はだれであったかだけで見る習慣。もうひとつの問題は、作曲家たちを民族的であるかどうかで色分けしてしまうことであつた。それに戦前は、どちらかといえばアカデミックな作曲家はドイツ系、民族派はフランス系とみたが、これもまたナンセンスなこと。

作曲家の作品である音楽は、その創造にうそがないかぎり、必ず、その国その時代の音楽であり、まして近代の音楽芸術が自立した人間の自己表現にほかならないとすれば、そんな「常識」はおよそ役に立たないのは明らかである。しかし、生きた音楽を聞けないあいだは仕方がなかったのである。

先入観からの脱出

わたしがそのような先入観をはっきり捨てたのは、尾崎宗吉の「小弦楽四重奏曲」をきいたときであつた。

尾崎宗吉は敗戦の年に中国で戦病死してしまったので、それこそ前記『日本の作曲家』尾崎宗吉の項で、諸井三郎の弟子としか知りようがなかった。

尾崎の遺作「夜の歌」を井上頼豊のチェロ・リサイタルできき、そのひとふしに触発されたのがはじまりで尾崎を探りはじめた私は、友人であり作曲上のライバルであつた小倉朗や山田一雄らに導かれてようやく「小弦楽四重奏曲」にたどりついたのであつた。

そこでは、こころよい叙情がしっかりした構成感にささえられ、簡潔でいきいきと息づいていた。生きた音楽が与えてくれたその感動は、それまでの「常識」をきれいさっぱりふりはらうインパクトになった。それから、師がだれであるかなどというより、その人の音楽をわたしはきくようになったのである。

尾崎宗吉が「小弦楽四重奏曲」でデビューしたのは、伊福部昭が「日本狂詩曲」でチェレブニン賞を得たのと同じ1935（昭和10）年のこと。ふたりとも二十歳そこそこであつた。

意味のないグループわけ

敗戦からしばらくのあいだ、戦争をくぐりぬけた作曲家たちはいくつかのグループを組んで活動した。

新作曲派協会には、清瀬保二、松平頼則、早坂文雄、それに最初は伊福部昭も加わっていた。そのため、新作曲派にはまっさきに民族主義のレッテルがはられた。

同じ時期に活動した平尾貴四男、安部幸明、高田三郎らのグループ地人会の方は、新作曲派協会とずいぶん違うように区別されていた。

しかしその地人会もひとりひとりを知っていくと、その区別に意味のないことがわかってきた。

かれらのなかでは平尾貴四男が一番早く逝ったけれども、さいわいよく演奏され続けてきたかれの室

内楽は、きけばきくほど日本的である。最近50年ぶりに復活したオーケストラ伴奏つき「フルート組曲」(1940)などは、さらにその印象が深い。

安部幸明の師はK. プリングスハイムである。最近かれのオーケストラをきく機会がないのが残念だが、いまでも書きつづけられている弦楽四重奏曲はきくたびに身近な親しみをおぼえる。かれの「弦楽四重奏曲第1番」は尾崎宗吉の「小弦楽四重奏曲」と同じ場、日本で最初の室内楽曲奨励オーディションで初演されたものであるが、それをいまの時点で並べて聞いたらおもしろいのではないか、などと思う。

高田三郎の師もまたプリングスハイムである。しかしかれの地人会当時の室内楽には、次にみる新作曲派協会の作曲家たちとなんと多くの共通性が感じられることか。

民族主義にもいろいろ

清瀬保二、伊福部昭ふたりの音楽を、ずっと以前のわたしは、ときにはそっくりのように聴いてしまうこともあったが、それぞれを深く知るにつれて、その違いもわかり、そしてまた共通する多くの根拠も認識できるようになった。

わたしにはまだ課題としてのこされている早坂文雄、そしていまも創作活動さかんな松平頼則を含めて民族派作曲家のなんとそれぞれに個性的であることか。

その違いの由来を、たとえば雑楽、邦楽、民謡など背負った伝統そのもので区別しようとする考えには、わたしは手ばなしでは賛成しない。たとえ同じ伝統にヒントがあったとしても、創造の過程で必ずその個性が刻印されるものだからだ。その刻印、つまりもっとも本質的、原理的なところに自己表現の意思と個性があらわれるように思うからである。

演奏者と聴衆の耳が時代をつくる

はからずもこの一文で、わたしは1935年に最初のポイントをおくことになったが、それはけっして偶

然ではなさそうだ。ひとあし先に歩みはじめていた清瀬や諸井にしても、確信をもって、自分の音楽のことばで管弦楽や室内楽を書きはじめるのがまた同じ年だからである。

このさい1935年を、日本の音楽の近代元年とでも提起してみよう。

わたしたちの音楽がその年からはじまったとして、そこから数えてまだ60年たらず。芸術の単位は少なくとも世紀、あるいは数世紀と考えるならまだ短い。わたしたちはいま、まさに演奏者と聴衆との耳で日本の作曲家たちの音楽を時代の音楽として定着させているさいちゅうなのではないか。

わたしたちの歩みは少しもおそくない。それどころか、日本の経済発展に似てむしろ急速すぎるほどではないか。

これからの数十年をかけて、わたしたちの、時代の音楽のことばによる作品、ここに言い及ばなかった作曲家たちあるいは次の世代の作曲家たちにも通底する普遍的な音楽を、ともにつかんでいきたいと思う。
(評論家)

今から14年前、新響では伊福部作品展を企画したが、「タブカーラ」は改訂初演であり、スコアから写譜してパート譜を作ることにしていた。

私はライブラリの係であったので、その「タブカーラ」のスコアを受け取りにヴィオラの佐藤（今の家内）と一緒に、ある休日の昼下がり先生のお宅にお伺いした。

私達は、東急大井町線の尾山台駅を降りて『上の部分に青いかわらのある白い堀』を目印に伊福部邸を目指した。先生のお宅につくと、スコアは、まだ完成していないとのことであった。私達はすぐに帰るつもりであったが、先生は非常に気さくな方で、そのまま書斎に案内された。机の上には「タブカーラ」の大きな五線譜が広げてあった。何となく落ち着かなくてモジモジしていると、先生はニコニコしながらおいしいお茶を入れて下さった。

書斎には、コーヒーに関する器具等が沢山あった。その中にコーヒー豆が入った小さな引き出しがいくつもついている箱があり、先生は2種類の豆を選んでブレンドし、私達にコーヒーを入れて下さった。

そのコーヒーを御馳走になりながら、コーヒーの話を色々とお伺いした。

まず、先生が愛用している陶器製のカリタを見て戴いた。それはある人が自分で作ったものだそうで、先生がおっしゃるには、おいしいコーヒーを抽出するには、温度と抽出の速度が大切で、このカリタは、適切な温度と抽出速度になるように肉厚・底の穴を考えて設計されたものだとのことであった。

また部屋には、大きな水時計のような見慣れぬ器具があった。それは「水出しコーヒー」を作る道具であった。先生はこの器具を使ってコーヒーを10時間かけて抽出され、これで抽出したコーヒーが一番おいしく、お客様が来るのが分かっているときはその時間に合わせてコーヒーを抽出するとおっしゃっていた。入れ方によって微妙に変化するコーヒーの味を追求してやまない先生の姿が、大変印象的だった（わが家でも先生の刺激を受け、水出しコーヒーの器具が揃うことになった）。



写真：山崎慎一郎(1994年9月)

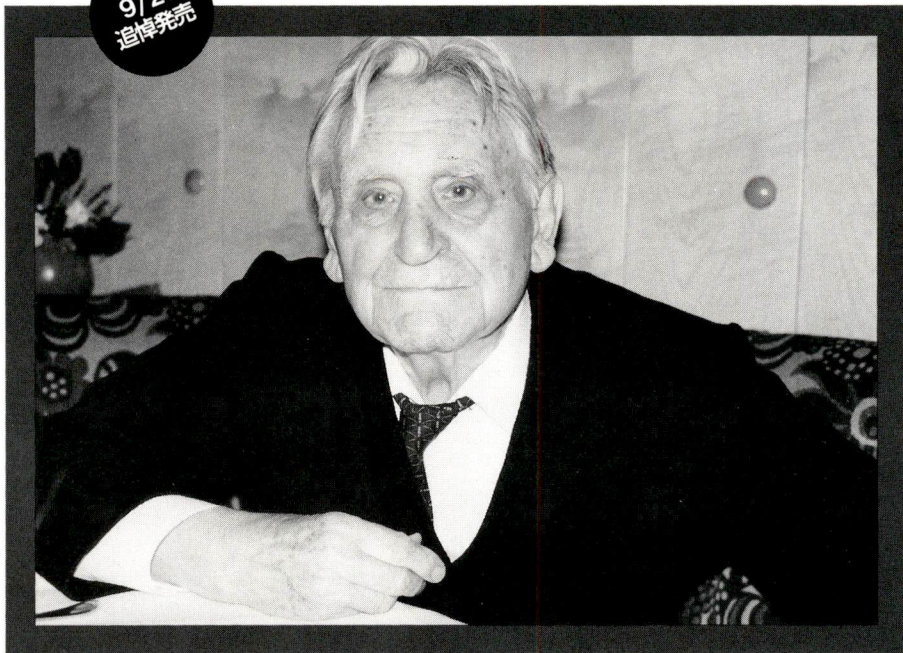
大先生のお宅におじゃまするということでもかなり緊張していた私達だったが、思いがけず丁寧なおもてなしを受け、ほのほのとした気持ちで帰途についた。

「タブカーラ」のスコアについては、後日、佐藤が再び先生のお宅を訪問して受け取り、団員が手分けして写譜した。

その後、新響では、四苦八苦して伊福部先生の曲に取り組んでいた。指揮をされていた故芥川先生も、日曜練習をもう1回増やそうとされていたほどであった（しかしその日は、私達の結婚式で、何十人もの団員が欠席することになるので練習は無理だと松本元理事長(Vn.)が芥川先生に申し入れ、計画は中止になった）。

いまでは、伊福部作品を何度も演奏し、新響の『おはこ』という感があるが、私は「タブカーラ」を演奏するたびに、温かく迎えていただいた先生、また緻密に考えられてコーヒーを入れてくださった先生を思い出す。

9/21
追悼発売



アイヒホルン畢生の名演。

去る6月29日、85歳で逝去した巨匠の
このうえなく美しい最期の録音!!

「最後に良い仕事をさせてもらって、ありがとう。
天国への道から、さようなら——」
クルト・アイヒホルン



ブルックナー 交響曲第6番 アイヒホルン

●ブルックナー
交響曲第6番長調（ノヴァーク版）
クルト・アイヒホルン指揮
リンツ・ブルックナー管弦楽団
[CD] 30CM-345 ¥3,090(税込)
★デジタル録音：1994年3月、リンツ・ブルックナーハウス

11/21

急遽発売

ドイツ最長老指揮者アイヒホルンの
歴史的な録音、第二番初稿版を
マエストロが改訂した特別盤完成!!
ブルックナー交響曲第2番「アイヒホルン盤」
クルト・アイヒホルン指揮リンツ・ブルックナー管弦楽団
[CD] 25CM-380 ¥2,575(税込)
★デジタル録音：'91年3月、リンツ・ブルックナーハウス

ブルックナーとアイヒホルン。幸福な邂逅の奇跡!



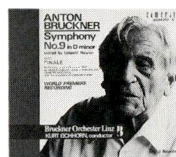
●ブルックナー
交響曲第7番長調
＜ノヴァーク版＞
[CD] 32CM-165
¥3,008(税込)
「レコード芸術」推薦



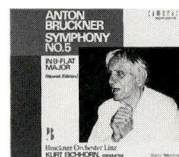
●ブルックナー
交響曲第2番短調
＜1872&1873年稿＞世界初録音
[CD] 30CM-195～6（2枚組）
¥5,634(税込)
「レコード芸術」準特選



●ブルックナー
交響曲第8番短調
＜ノヴァーク・1890年版＞
[CD] 32CM-225
¥3,008(税込)
「レコード芸術」準推薦



●ブルックナー
交響曲第9番（終楽章付）
＜ノヴァーク・1992年12月復元版＞
世界初録音
[CD] 30CM-275～6（2枚組）
¥5,634(税込)
「レコード芸術」特選



●ブルックナー
交響曲第5番変ロ長調
＜ノヴァーク版＞
[CD] 25CM-335～6（2枚組）
¥5,150(税込)
「レコード芸術」特選

Camera
カメラータトウキョウ

〒150 東京都渋谷区神宮前5-50-6 青山テクネス8F ☎03-3498-5890 FAX. 03-3498-6239

伊福部昭年譜

年齢	伊福部昭年譜	楽界／世相
1914(大3)	5月31日 北海道・釧路市に生まれる。但し小学校入学を早めるために戸籍上は3月5日で届出た	1914 第1次世界大戦起る 1919 ベルサイユ講和条約
1920(大9)	6 網走小学校に入学。その後、父の勤務の関係で札幌に転居	
1922(大11)	8	1922 札幌、市制を施く
1923(大12)	9 音更小学校に転校。アイヌの生活に深く係わり、独特の文化・芸能を知る。ギター、ヴァイオリンを習得し始める	1923 関東大震災 1924 ベートーヴェン「第9」日本初演 1925 山田耕筰・近衛秀麿、日本交響楽協会を結成 NHK本放送開始
1926(昭1)	12 札幌二中入学。三浦淳史(評論家)と知り合う	1926 新交響楽団(現N響)結成
1927(昭2)	13 三浦淳史のすすめでピアノ曲の作曲を始める	1927 新響、定期演奏会を始める
1928(昭3)	14 ストラヴィンスキーの「春の祭典」に共感し管弦楽曲の作曲を始める	1931 満州事変起る
1932(昭7)	18 北海道帝国大学農学部林学科に入学、学内オーケストラのコンサートマスターとなる	1932 満州国建国宣言
1933(昭8)	19 10月8日次兄・勲のギター・リサイタルに共演、ギター独奏曲「ノクチュルヌ」初演される レコード「スペイン音楽集」に感激し、演奏者ジョージ・コーブランドに手紙を出したことがきっかけで「ピアノ組曲」を作曲する	1933 日本、国際連盟を脱退
1934(昭9)	20 三浦淳史、早坂文雄と「新音楽連盟」を結成、札幌で「第1回国際現代音楽祭」を開催しサティなどを日本初演	1934 レコード検閲実施 ヒットラー総統就任
1935(昭10)	21 北大を卒業し地方林務官として厚岸の森林事務所に勤務 「日本狂詩曲」を作曲、チェレプニン賞第1席入賞	
1936(昭11)	22 チェレプニン来日、作曲法と管弦楽法の個人教授を受ける 「日本組曲」「日本狂詩曲」がチェレプニン・エディションとして出版される	1936 国体明徴の声明：天皇の神格化が決定的となる
1937(昭12)	23 森林事務所勤務の合間に「土俗的三連画」を作曲、チェレプニンに献呈、チェレプニン・エディションとして出版される	1937 蘆溝橋事件、日中戦争の発端となる
1938(昭13)	24 「ピアノ組曲」がヴェネツィア国際音楽祭に入選	1938 日本軍、武漢三鎮を占領 1939 第2次大戦始まる
1940(昭15)	26 札幌の北大演習林勤務となる	1940 「紀元二千六百年」
1941(昭16)	27 4月11日 舞踊家・勇崎アイと結婚	1941 太平洋戦争始まる
1942(昭17)	28 次兄・勲、蛍光塗料研究中の放射線障害で死亡	1942 ミッドウェー海戦、戦局の転機
1943(昭18)	29 兄の霊に捧げる「交響譚詩」作曲、ビクターの第2回管弦楽曲懸賞第1位、文部大臣賞を受賞	1943 日本軍ガダルカナル島撤退
1944(昭19)	30 新京音楽院の招きで満州を旅行。満州国の委嘱により音詩「寒帯林」を作曲、翌年ハルビンの新京交響楽団で初演	1944 マリアナ沖海戦
1945(昭20)	31 木材震動の研究での放射線障害で吐血、1年間療養する	1945 広島、長崎へ原爆投下、敗戦
1946(昭21)	32 長女玲子誕生。日光へ転居。東京音楽学校作曲科講師就任	
1947(昭22)	33 次女姜子(きょうこ)誕生。等々力に転居。最初の映画音楽「銀嶺の果て」を手掛ける。新作曲家協会に加入する 第1回北海道新聞文化賞受賞	1947 日本国憲法施行
1948(昭23)	34 現住所の世田谷区尾山台に転居	1949 東京音楽学校／美術学校統合、東京芸術大学発足
1949(昭24)	35 長男極(きわみ)誕生	

	年齢	伊福部昭年譜	楽界／世相
1950(昭25)	36	第19回毎日音楽コンクール作曲部門の審査員を務める	1950 朝鮮動乱始まる
1951(昭26)	37	「音楽入門」執筆、要書房より出版	1951 サンフランシスコ講和条約調印
1953(昭28)	39	芸大講師を辞す。「管弦楽法」第1巻執筆、音楽之友社より出版	
1954(昭29)	40	映画「ゴジラ」(第1作)の音楽を手掛ける	1954 カラヤン、バックハウス来日 1955 早坂文雄没
1956(昭31)	42	毎日映画音楽コンクール音楽賞、イタリアのサン・ジョルジオ賞受賞 1958年、映画人口は12億を超え、ピークを築いた。伊福部の活動も映画音楽を中心とした創作が主となった	1956 東海道線全線電化 1958 第1回大阪国際フェスティバル 1959 皇太子(現天皇)結婚 ストラヴィンスキー来日 1963 ケネディ大統領暗殺 1964 オリンピック東京大会 1965 山田耕筰没
1968(昭43)	54	「管弦楽法」第2巻 音楽之友社より出版	1968 明治百年
1970(昭45)	56	日本万国博覧会「三菱未来館」の音楽を担当	1970 この頃から公害問題が深刻化する 1972 札幌冬期オリンピック開催 この頃「オイル・ショック」
1974(昭49)	60	東京音楽大学作曲科教授就任	1975 この年、企業倒産戦後最高となる
1976(昭51)	62	東京音楽大学学長就任	1976 ロッキード事件発覚
1977(昭52)	63	夫人とともに欧米を旅行	1977 チェレプニン没
1979(昭54)	65	渡欧、ブルノ・フィルでのヴァイオリン協奏曲第2番の初演に立会う	1979 東京サミット開催
1980(昭55)	66	紫綬褒章受賞。新響「日本の交響作品展・4 伊福部昭」	1980 イラン／イラク戦争
1981(昭56)	67	北海道開拓百年記念植樹祭に「北海道賛歌」を作曲、指揮	1983 N響、3月定期を『交響譚詩』をふくむ全日本人作品で構成
1984(昭59)	70	「古稀記念コンサート」開かれる	
1985(昭60)	71	「音楽入門」改訂版、現代文化振興会より出版	1985 日航ジャンボ御巣鷹山に墜落
1987(昭62)	73	東京音楽大学民族音楽研究所所長に就任。中国から中日友好10周年記念演奏会の招待を受け訪中。勲三等瑞宝章受賞	1987 ポーランドで「連帯」発足
1988(昭63)	74	イタリアのプラトで「マエストロ アキラ イフクベへのオマージュ」開催、メッセージを送る。	1988 リクルート疑惑発覚 1989 ベルリンの壁崩壊 芥川也寸志、カラヤン没
1991(平3)	77	サントリー音楽財団主催「作曲家の個展・伊福部昭」開催	1991 山田一雄没
1994(平6)	80	傘寿を迎える	

作品年譜

作品名 (テキスト作者、出典)	作曲 年代	ジャンル・編成	演奏 時間	初演記録・受賞	出版
ノクチュルヌ	1932	ギター	1933. 10. 8	伊福部勲	
ピアノ組曲	1933	ピアノ	22"	1938 ジーノ・ゴリーニ 1938ベネチア国際現代音楽祭入選	Universal Schirmer Promusica 竜吟社、全音
日本狂詩曲	1935	3管オーケストラ	15"	1936. 4. 5 フェビアン・セヴィツキー/ピープルス響(ボストン) チェレプニン賞作曲コンクール第1席(パリ)	Universal Schirmer Promusica 竜吟社
土俗的三連画	1937	14の独奏楽器	12"	1939. 3. 13 小船幸次郎/新響(現・N響) アレクサンドル・チェレプニンに献呈	同上
バレエ音楽 盆踊り	1938	打楽器 ピアノ	40"	1938 ウィーン・ロシア・バレエ団	同上及び音友
(8場面よりなる舞台舞踊音楽)					
交響舞曲 越天楽	1940	オーケストラ 混声合唱 brass band	90"	1944. 7. 7 作曲者指揮、勇崎愛子(現・伊福部昭夫人) 振付、紀元2600年を記念する札幌、野外大聖舞踊祭(総出演者600人)	
ピアノと管弦楽のための 協奏風交響曲	1941	ピアノ 3管オーケストラ	36"	1942. 3. 3 松隈陽子(pf) M. グルリット/東響(現・東フィル)、焼失	
交響譚詩	1943	2管オーケストラ	18"	1943. 9. 4 (レコード録音)、同年11. 20(ステージ) 山田和男/東響…音友 ビクター第2回管弦楽懸賞募集第1位、文部大臣賞	
フィリピン国民に贈る 管弦楽序曲	1944	3管オーケストラ 2ピアノ	18"	1944. 1. 30 (式典)、尾高尚忠/日響(現・N響)	
吉志舞(古典風舞曲)	1944	吹奏楽	10"	1944. 4. 29 日響(放送) 海軍の依頼による (フランス式36人)	
兵士の序楽	1944	2管オーケストラ	12"	1944 日響 陸軍の依頼による	
音詩 寒帯林	1944	2管オーケストラ	28"	1945. 4. 26 山田和男/新京響(ハルビン) 満州国の依頼による	
ギリヤーク族の古き吟誦歌	1946	ソプラノ ピアノ	14"	1947. 1. 26 ベルトラメリ能子	森田楽譜、全音
(伊福部昭 詩)					
バレエ エゴザイダー	1947	舞踊 ピアノ	20"	1947. 12. 1 江口隆哉、宮操子振付	
ヴァイオリンと管弦楽 のための協奏曲	1948	ヴァイオリン 3管オーケストラ	40"	1948. 1. 22 江藤俊哉vn、上田仁/東宝響(現・東響) 破棄	
バレエ さ迷える群像	1948	舞踊 ピアノ	30"		
バレエ サロメ(初版)	1948	舞踊	45"	1948. 5. 29 上田仁/東宝響 貝谷八百子振付 2管オーケストラ	
子供のための舞踊曲	1949	1管オーケストラ	50"	初演期日不明 作曲者指揮によりボリドール・レコードの吹込	
リズム遊びのための10の小品					
バレエ 憑かれたる城(バスカーナ)	1949	舞踊	50"	1949. 12. 20 上田仁/東宝響 貝谷八百子振付 2管オーケストラ	
サハリン島土蛮の三つの揺籃歌	1950	歌 ピアノ	15"	1949. 10 ベルトラメリ能子(NHK)	春秋社、全音
(伝承詩)					
バレエ プロメテの火	1950	舞踊	50"	1950. 12. 11 上田仁/東宝響 江口隆哉振付 2管オーケストラ	
バレエ 日本の太鼓	1951	舞踊	20"	1951. 12. 29 上田仁/東響 江口隆哉振付 2管オーケストラ	
ヴァイオリンと管弦楽 のための狂詩曲	1951	ヴァイオリン 2管オーケストラ	23"	1948年vn協奏曲の改作。ジェノワ国際作曲コンクール入選 破棄	
バレエ 人間釈迦	1953	2管オーケストラ 合唱	120"	1953. 11. 6 上田仁/東響 石井漠振付	
シンフォニア・タブカーラ	1954	3管オーケストラ	30"	1955. 1. 26 セヴィツキー/インディアナポリス響 三浦淳史に献呈	
ヴァイオリンとピアノの ための二つの性格舞曲	1956	ヴァイオリン ピアノ	18"	1956. 10 アムステルダム二重奏団(ナッポドケリン、アリス・ヘックス)	
アイヌの叙事詩に依る 対話体牧歌(伝承詩)	1956	歌 ティンパニ	12"	1957. 1. 12 ベルトラメリ能子、小森宗太郎	音友、全音
仮面舞踊劇 ファーションジャルボー	1956	舞踊	100"	1956. 11. 21 上田仁/東響 江口隆哉、宮操子振付 3管オーケストラ	

作品名 (テキスト作者, 出典)	作曲 年代	ジャンル・編成	演奏 時間	初演記録・受賞	出版
合唱讃歌 オホーツクの海	1958	混声合唱 3管オーケストラ (ヴァイオリン, ヴィオラなし)	20"	1958. 2. 26 北海道放送 作曲者指揮 東響、 東京ヴォーカル	「音楽芸術」付録
ヴァイオリンと管弦楽 のための協奏風狂詩曲	1959	ヴァイオリン 3管オーケストラ		1959. 11. 5 小林武史 (vn) 森正/ABC響 1951年作品の改作	
知床半島の漁夫の歌 (更科源蔵 詩)	1960	バス ピアノ	9"	1961. 2. 9 木内清治 (bs) 大島正泰 (pf)	全音
バレエ 孤剣舞	1960	舞踊 オーケストラ		1960. 10. 26 江口隆哉振付	
ピアノと管弦楽のための リトミカ・オスティナータ	1961	ピアノ 3管オーケストラ	23"	1961. 10. 9 金井裕 (pf) 上田仁/東響	
古代日本施法による踏歌 と	1967	ギター	17"	1968. 2. 11 パリ国立放送 阿部保夫	全音、現代ギター社
箏篋歌	1969	ギター	17"	1969. 5. 27 渡辺範彦	同上
ギターのためのトッカータ	1970	ギター	7"	1970 阿部保夫	
ブーレスク風ロンド	1972	和太鼓と吹奏楽	16"	1972 手塚幸紀/東京佼正吹奏楽団	
バレエ 日本二十六聖人	1972	舞踊 2管オーケストラ	150"	1972. 3. 30 小林研一郎/東響/日本合唱協会 江口隆哉振付	
えいきょく びんた た ら 郢曲 贅多々良	1973	能管 2篠笛 竜笛 篳篥 琴 琵琶 (筑前 薩摩) 3箏 十七絃 小鼓 太鼓 楽太鼓	18"	1973. 10. 5 田村拓男/日本音楽集団 文部省・文化庁委嘱	
ヴァイオリン協奏曲	1975	ヴァイオリン 3管オーケストラ	23"	1975. 9. 17 黒沼ユリ子 (vn) 山岡重信/日本フィル	
オーケストラとマリムバのための ラウダ・コンチェルタータ	1976	マリムバ 3管オーケストラ	27"	1976. 9. 12 安倍圭子 (mar) 山田一雄/新星日響 新星日響創立10周年記念作品	
ヴァイオリン協奏曲第2番	1979	ヴァイオリン 3管オーケストラ	24"	1979. 3. 7 小林武史 (vn) コシユラー/プルノ・フィル 小林武史に献呈	
二十絃箏曲 物云舞	1979	二十絃箏独奏	10"	1979. 11. 28 野坂恵子 野坂恵子に献呈	
タブカーラ交響曲(改訂版)	1979	3管オーケストラ	28"	1980. 4. 6 芥川也寸志/新響(当団)	
バロック・リュートのための ファンタジア	1980	リュート独奏	11"	1980 デボラー・ミンキン	
北海道賛歌 (森みつ 詩)	1981	混声合唱 2管オーケストラ		1981 作曲者指揮 北海道開拓百年記念	
二十絃箏とオーケストラのための 交響的エグログ	1982	二十絃箏 3管オーケストラ	29"	1982. 3. 24 野坂恵子(箏) 小林研一郎/東響	
S Fファンタジー No. 1, 2, 3	1983	3管オーケストラ	No1=18" No2=17" No3=13"	1983. 8. 5 汐沢安彦/東響	
オーケストラのための ロンド・イン・ブーレスク	1983	3管オーケストラ	11"	1983. 8. 5 汐沢安彦/東響	
バレエ 日本の太鼓(改訂版)	1984	2管オーケストラ 8太鼓	20"	1984. 2. 21 手塚幸紀/東響	
ヴァイオリンとピアノのための ソナタ	1985	ヴァイオリン ピアノ	20"	1985. 6. 8 小林武史 (vn)、黒川美方子 (pf)	音友
舞踊曲 サロメ(改訂版)	1987	3管オーケストラ	45"	1987. 5. 15 山田一雄/新星日響	
ソプラノ、ファゴット、コントラバス、 ピアノのための讃歌	1988	ソプラノ ファゴット コントラバス ピアノ	14"	1988. 3. 4 藍川由美 (sop)、太田茂 (fg)、吉田秀 (cb)、斉藤京子 (pf)	
オホーツクの海					
交響頌偈 釈迦	1989	混声合唱 3管オーケストラ	40"	1989. 4. 8 小松一彦/東響 東京オラトリオ研究会、大正大学音楽部混 声合唱団 合唱指揮 郡司博	
箏篋歌 - ハープのための -	1989	ハープ		1990. 4. 19 木村茉莉	
管弦同伴 鞆の音 (細川潤次郎作詞, 初世 萩岡松韻作曲)	1990	3管オーケストラ 5箏 2三絃 箏 4小鼓 太鼓		1990. 5. 3 佐藤功太郎/東響 萩岡松韻、庄司萩園、渡辺岡華、佐藤 岡豊、佐藤絲豊、萩岡松柯、藤尾岡佳、中川善雄、堅田喜佐久、田 中佐幸、梅屋福太郎、望月左之助、望月左吉	全音
管弦楽のための日本組曲	1991	3管オーケストラ	20"	1991. 9. 17 井上道義/新日フィル サントリー音楽財団委嘱	
摩周湖(更科源蔵 詩)	1992	ソプラノ ヴァイ オリン ハープ	16"	1993. 5. 1 藍川由美 (sop)、百武由起 (vn)、木村茉莉 (hp)	
交響的音画 釧路湿原	1993	3管オーケストラ	30"	1993. 10. 20 外山雄三/新星日響 釧路市の委託による (舞台初演)	

映画音楽作品

- ’47 銀嶺の果て (谷口千吉)
幸福への招待 (千葉泰樹)
- ’48 第二の人生 (関川秀雄)
黒馬の団七 (稲垣浩)
魔風園の女 (大庭秀雄)
生きている画像 (千葉泰樹)
社長と女店員 (大庭秀雄)
検事と女看守 (吉村廉)
静かなる決闘 (黒沢明)
斬られの仙太 (滝沢英輔)
美しき罰 (大庭秀雄)
深夜の告白 (中川信夫)
ジャコ萬と鉄 (谷口千吉)
虹男 (牛原彦彦)
恋狼火 (洲多親)
育ちゆく村 [短篇] (関川秀雄)
くちびるに歌をもて [短篇] (関川秀雄)
- ’50 俺は用心棒 (稲垣浩)
魔の黄金 (谷口千吉)
戦慄 (関川秀雄)
遥り母の国 (伊藤大輔)
乙女の性典 (大庭秀雄)
怒りの街 (成瀬巳喜男)
白い野獣 (成瀬巳喜男)
きけわだつみの声 (関川秀雄)
てんやわんや (渋谷実)
午前0時の出獄 (小石栄一)
戦火の果て (吉村公三郎)
軍艦すてに煙なし (関川秀雄)
レ・ミゼラブル
[第一部 神と悪魔] (伊藤大輔)
レ・ミゼラブル
[第二部 神と自由の旗] (マキノ雅弘)
- ’51 愛と憎しみの彼方へ (谷口千吉)
偽るの盛装 (吉村公三郎)
阿修羅判官 (森一生)
風にそよぐ葦 [後編] (春原政久)
無国籍者 (市川崑)
自由学校 (渋谷実)
誰か私を裁くのか (谷口千吉)
限りなき情熱 (春原政久)
盗まれた恋 (市川崑)
この旗に誓う (小杉勇)
源氏物語 (吉村公三郎)
真説石川五右衛門 (関川秀雄)
’52 曠野の誓い (京極高英)
最後の顔役 (小杉勇)
雪崩 (新藤兼人)
西陣の姉妹 (吉村公三郎)
死の街を脱れて (小石栄一)
振袖狂女 (安田公義)
原爆の子 (新藤兼人)
暴力 (吉村公三郎)
続・馬喰一代 (島耕二)
激流 (谷口千吉)
- ’53 千羽鶴 (吉村公三郎)
村八分 (今泉善珠)
縮図 (新藤兼人)
混血児 (関川秀雄)
愛情について (千葉泰樹)
欲望 (吉村公三郎)
アナタハン(J.V.スタンバーグ)
玄海の鰐 (小杉勇)
白魚 (熊谷久虎)
蟹工船 (山村聡)
夜明け前 (吉村公三郎)
魅せられたる魂 (春原政久)
無法者 (佐伯幸三)
女の一生 (新藤兼人)
ひろろ美 (関川秀雄)
ゼロ弾きのゴーシュ (森永健次郎/川尻泰司)
- ’54 お菊と播磨 (伊藤大輔)
足摺岬 (吉村公三郎)
春琴物語 (伊藤大輔)
どぶ (新藤兼人)
緑の仲間 (森一生)
人生劇場 望郷篇 三州吉良港 (萩原遼)
泥だらけの青春 (菅井一郎)
ゴジラ (本多猪四郎)
若い人たち (吉村公三郎)
春の渦巻 (枝川弘)
- ’55 童の光 (森一生)
明治一代女 (伊藤大輔)
火の鷲走 (田中重雄)
泉へのみち (笈正典)
銀座の女 (吉村公三郎)
東京暴力団 (鈴木重吉)
女中ッ子 (田坂具隆)
狼 (新藤兼人)
三つの顔 (井上梅次)
王将一代 (伊藤大輔)
美女と怪竜 (吉村公三郎)
誘拐魔 (小野浩)
ブルーバ (鈴木重吉)
続・警察日記 (久松静児)
弾痕記 (斎村和彦)
- ’56 薔薇の紙道館 (佐伯幸三)
ビルマの堅琴・第一部 (市川崑)
黒帯三国志 (谷口千吉)
銀しるが心志 (新藤兼人)
ビルマの堅琴・第二部 (市川崑)
神坂四郎の犯罪 (久松静児)
真昼の暗黒 (今井正)
流離の岸 (新藤兼人)
鬼火 (千葉泰樹)
青春の音 (関川秀雄)
好人物の夫婦 (千葉泰樹)
惚れるな弥生八 (村山三男)
霧の音 (清水宏)
空の大怪獣ラドン (本多猪四郎)
- ’57 いとはん物語 (伊藤大輔)
女優 (新藤兼人)
大阪物語 (吉村公三郎)
柳生武芸帳 (稲垣浩)
憎いもの (丸山誠治)
地獄花 (伊藤大輔)
殺したのは誰だ (中平康)
海の野郎ども (新藤兼人)
最後の脱走 (谷口千吉)
爆音と大地 (関川秀雄)
下町 (千葉泰樹)
地上 (吉村公三郎)
地球防衛軍 (本多猪四郎)
’58 柳生武芸帳双龍秘剣 (稲垣浩)
悲しきは女だけに (新藤兼人)
二人だけの橋 (丸山誠治)
永壁 (増村保造)
夜の鼓 (今井正)
福沢諭吉の少年時代 (関川秀雄)
季節風の彼方に (関川秀雄)
大怪獣バラン (本多猪四郎)
’59 暗黒街の顔役 (岡本喜八)
コタンの口笛 (成瀬巳喜男)
女と海賊 (伊藤大輔)
或る剣豪の生涯 (稲垣浩)
その壁を砕け (中平康)
殺されたスチュワーデス 白か黒か (猪俣勝人)
日本誕生 (稲垣浩)
宇宙大戦争 (本多猪四郎)
- ’60 親鸞 (田坂具隆)
疵千両 (田中徳三)
続・親鸞 (田坂具隆)
炎の城 (加藤泰)
忠直卿行状記 (森一生)
’61 大坂城物語 (稲垣浩)
宮本武蔵 (内田吐夢)
釈迦 (三隅研次)
反逆児 (伊藤大輔)
二人の息子 (千葉泰樹)
’62 姉系図 (三隅研次)
座頭市物語 (三隅研次)
きんさこべ (田坂具隆)
キングコング対ゴジラ (本多猪四郎)
鯨神 (田中徳三)
鯨・始皇帝 (田中重雄)
忠臣蔵 [花の巻・雪の巻] (稲垣浩)
王将 (伊藤大輔)
’63 新・座頭市物語 (田中徳三)
わんぱく王子の大蛇退治 (芹川有吾)
この首一万石 (伊藤大輔)
手討 (田中徳三)
座頭市凶状旅 (田中徳三)
妖僧 (衣笠貞之助)
座頭市喧嘩旅 (安田公義)
十三人の刺客 (工藤栄一)
海底軍艦 (本多猪四郎)
’64 帝銀事件・死刑囚 (熊井啓)
- モスラ対ゴジラ (本多猪四郎)
忍びの者・霧隠才蔵 (田中徳三)
宇宙大怪獣ドゴラ (本多猪四郎)
渚を駆ける女 (酒井欣也)
腕闘遊侠伝・破れ鉄火 (田中徳三)
座頭市血笑旅 (三隅研次)
乞食大将 (田中徳三)
三大怪獣・地球最大の決戦 (本多猪四郎)
’65 徳川家康 (伊藤大輔)
座頭市二段斬り (井上昭)
日本列島 (熊井啓)
無法松の一生 (三隅研次)
フランケンシュタイン対地底怪獣 (本多猪四郎)
怪獣大戦争 (本多猪四郎)
座頭市地獄旅 (三隅研次)
’66 眠狂四郎多情剣 (井上昭)
大魔神 (安田公義)
奇巖城の冒険 (谷口千吉)
座頭市の歌が聞える (田中徳三)
大殺陣・雄呂血 (田中徳三)
フランケンシュタイン怪獣サンダー対ライオン (本多猪四郎)
大魔神怒る (三隅研次)
一万三千人の容疑者 (関川秀雄)
眠狂四郎無頼剣 (三隅研次)
大魔神逆襲 (森一生)
’67 キングコングの逆襲 (本多猪四郎)
十一人の侍 (工藤栄一)
座頭市血煙り街道 (三隅研次)
’68 怪獣雪女郎 (田中徳三)
河内フーテン族 (千葉泰樹)
怪獣総進撃 (本多猪四郎)
若者よ挑戦せよ (千葉泰樹)
’69 超高層のあけぼの (関川秀雄)
鬼の棲む館 (三隅研次)
緯度0大戦争 (本多猪四郎)
’70 座頭市と用心棒 (岡本喜八)
ゲゾラ・ガニメ・カメーバ決戦! 南海の大怪獣 (本多猪四郎)
商魂一代・天下の暴れん坊 (丸山誠治)
’72 地球攻撃命令・ゴジラ対ガイガン (福田純)
’73 新座頭市物語・笠間の血祭り (安田公義)
人間革命 (舛田利雄)
’74 狼よ落日を斬れ 風雪篇・激闘篇 (三隅研次)
サンダーカン八番唱曲・望郷 (熊井啓)
メカゴジラの逆襲 (本多猪四郎)
扉はひらかれた (田中徳三)
’78 おひさま (熊井啓)
’91 土俗の乱声 [ドキュメンタリー] (前田憲二)
ゴジラ対キングギドラ (大林一樹)
’92 ゴジラVSモスラ (大河原孝夫)

ディスコグラフィー (映画音楽を除く)

ピアノ/組曲	pf, 遠藤郁子 東芝EMI TYCY5369~70	手塚幸紀/東響 キング KICC-2011
日本狂詩曲	山田一雄/新星日響 フォンテック FOCD-2512	石井直木/新星日響 東芝EMI TYCY-5217
土俗的三連画	山田和男(一雄)/東響 東芝EMI CZ30-9017	ヴァイオリン協奏曲第2番 芥川也寸志/新響/vn, 小林武史 フォンテック FOCD-3245
交響譚詩	山田一雄/新星日響 フォンテック FOCD-2512	二十絃箏曲 物云舞 野坂恵子(箏) 東芝EMI TYCY-5296
	ブルステン'85 東芝EMI TYCY5369~70	野坂恵子(箏) カメラータ・トウキョウ 32CM-290
	芥川也寸志/新響 フォンテック FOCD-3245	パロック・リュートのための デボラー・ミンキン(リュート) フォンテック FOCD ファンタジー -3144
	手塚幸紀/東響 キング KICC-2011	二十絃箏とオーケストラのため 井上道義/東響/野坂恵子(箏) フォンテック FOCD の交響的エグログ -3143
	広上淳一/マルメ響 Gramofon AB BIS CD-47 (BIS-KKCC2022)	井上道義/京響/野坂恵子(箏) 東芝EMI TYCY -5296
	山田和男/東響 東芝EMI CZ30-9017	SF交響ファンタジー第1番 石井直木/新響 フォンテック FOCD-3140
サハリ島土民の	sop, 平田恭子/pf, 井上直幸 カメラータ・トウキョウ 32CM-290	ハルエ音楽日本の大説 [ジャコモロ・ジャンコ] 伊福部昭/新星日響 東芝EMI TYCY-5217
三つの操縦歌	井上道義/東響/vn, 小林武史 フォンテック FOCD -3143	ヴァイオリンとピアノのための vn, 花崎淳生/pf, 浅井道子 東芝EMI TYCY ソナタ -5369~70
ヴァイオリンと管弦楽のための	若杉弘/読売日響/pf, 小林仁 ビクター VDC-5505	オホーツク海 sop, 藍川由美/fg, 井上俊次/cb, 吉田秀/pf, 遠藤郁子 東芝EMI TYCY-5369~70
協奏風狂詩曲	井上道義/東響/pf, 藤井一典 フォンテック FOCD -3143	ヴァイオリン・ソナタ vn, 小林武史/pf, 梅村祐子 カメラータ・トウキョウ 32CM-290
ピアノと管弦楽のための	田村拓男/日本音楽集団 カメラータ・トウキョウ 32CM-290	箏篋歌——ハープのための hp, 木村茉莉 東芝EMI TYCY-5369~70
「リトミカ・オスティアータ」	山田一雄/新星日響/安倍圭子(マリンバ) フォンテック FOCD-2512	交響頌儀 [釈迦] 石井直木/新響/合唱団OMP/千葉大学合唱団 フォンテック FOCD-3140
古代日本施法に依る蹈歌	g, 阿部保夫 東芝EMI CZ30-9017	摩周湖 sop, 藍川由美/vn, 百武由起/hp, 木村茉莉 東芝EMI TYCY-5369~70
箏篋歌	g, 西村洋 フォンテック FOCD-3144	銅路湿原 交響的音画 大友直人/新星日響 フォンテック FOCD-9057
ギターのためのトゥッカータ	g, 西村洋 フォンテック FOCD-3144	
郎曲饗多々良	田村拓男/日本音楽集団 カメラータ・トウキョウ 32CM-290	
ラウダ・コンチェルタータ	山田一雄/新星日響/安倍圭子(マリンバ) フォンテック FOCD-2512	
シンフォニア・タブカーラ (79改)	芥川也寸志/新響 フォンテック FOCD-3245	

新交響楽団のプロフィール

新交響楽団は1956年に創立された自主運営のアマチュア・オーケストラです。創立当初から名誉音楽監督の故芥川也寸志の指導のもとに活動を行い、旧ソ連（1967）および国内各地での演奏旅行をはじめ、ベートーヴェン・チクルス（1966）、ストラヴィンスキー・バレエ音楽三部作一挙上演（1975）などの演奏活動を行ってきました。

1976年の創立20周年記念演奏会「日本の交響作品展」によって「芥川也寸志と新交響楽団」はアマチュア・オーケストラとして初めて第8回鳥居音楽賞（現サントリー音楽賞）を受賞しました。演奏されることの少ない日本人作曲家の作品を積極的に紹介していこうという邦人作品シリーズはその後毎年1回ずつ10年間継続され、これら演奏会のライヴ録音はレコード・CDとなって国内外で高い評価を受けています。その後もショスタコーヴィチ交響曲第4番の日本初演（1986）、中国人作曲家を招聘しての「中国作品展」（1987）、細川俊夫に作曲委嘱した「ヒロシマ・レクイエム」の初演（1989）など、また1991年には「現代の交響作品展'91」を石井眞木の指揮で松村禎三、石井眞木、伊福部昭の作品、92年には同'92として委嘱作品を一般公募、若手作曲家・夏田昌和の作品を取り上げるなど、さまざまな新しい企画を実現させています。

1979年から88年にかけては名誉指揮者・故山田一雄によるマーラー交響曲全曲シリーズを11回にわたって行いましたが、これは日本のオーケストラでは同一指揮者による初めてのマーラー交響曲全曲演奏

となりました。

1993年9月にはベルリン芸術週間事務局からの招待を受けてベルリン・フィルハーモニー大ホールで藤田正典の委嘱新作、安倍圭子のマリimba独奏による伊福部昭の「ラウダ・コンチェルタータ」、山口恭範およびベルリン・パーカッション・アンサンブルの打楽器独奏による石井眞木の「浮游する風」を石井眞木の指揮で演奏しましたが、この演奏会はベルリン、フランクフルトなどドイツの主要6紙で絶賛されるなど、大きな成功を収めました。

団員は現在約130名で、毎週土曜日の夜が練習です。年4回の定期的な演奏会の他に、各地での依頼演奏会、音楽教室などの演奏活動も積極的に行っています。

●団員を募集しています

新交響楽団は会社員、教員、学生、主婦などなど、さまざまな職業・年齢にわたる団員で自主運営されているアマチュアオーケストラです。名誉音楽監督の故芥川也寸志が長年にわたって主張し続けてきた「音楽はみんなのもの」を実践し、常に新しい視点を持って活動してくために、あなたの力が必要です。何はともあれ、ぜひ一度お気軽に練習をご覧ください。オーディション等の詳細は下記までお問い合わせ下さい。

入団費は3,000円、団費月額4,000円。練習は毎週土曜午後6～9時、労音十条会館（JR京浜東北線東十条駅または埼京線十条駅下車）他にて。連絡先：安田浩三 ☎03(3352)5077



音楽のある幸せ、
届きます。



この先もずっと、音楽のある幸せが
続いてほしい、と思います。
誰もが手軽に、音楽を楽しめるように。
つくる人も安心して創作活動に
専念できるように。
JASRACは著作権の管理を通して、
音楽の未来を守っています。

JASRAC

日本音楽著作権協会

〒105 東京都港区西新橋1-7-13 ☎(03)3502-6551